パネル発表「幼稚園における動物飼育」
－教育課程と飼育－

赤石　元子

１　教育課程における動物飼育の位置づけ

本園では，自己の発達を軸とした教育課程を編成し，幼稚園での飼育動物とのふれあいを次のように位置づけている．

３歳児では，＜ねらい＞教師や安心できる友達，物や場所に親しみ，安定してすごす．＜内容＞飼育小動物や草花と出会い，安心して自分の思いを表す．４歳児では，＜ねらい＞興味や関心を持ったことを取り入れながら，遊びを広げていく．＜内容＞飼育小動物に興味をもってかかわり，親しむ．５歳児では，＜ねらい＞生活に見通しをもち，自分たちで進めていこうとする．＜内容＞飼育小動物の世話をし，生き物と深くかかわる．

パネル発表では，発達に応じた飼育動物とのかかわりを，「こどもと自然マップ」に掲載し，教育課程との関連を示した．

２　５歳児の生活と動物飼育

＜自分たちで動物の世話をする＞

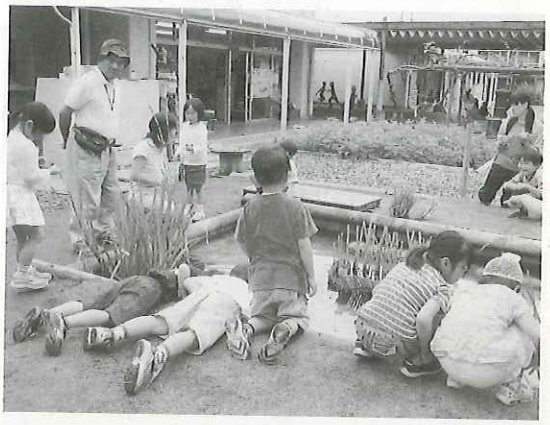
５歳児になると，動物当番の役割を担い，飼育している合鴨やチャボの世話を自分たちで進めている．休日は親子で来園し，動物の世話をしている．

動物当番「水，入れるよ」

＜合鴨のヒーちゃんのための池を作ろう＞

霜柱が解け，ヒーちゃんのための池を作ろうと遊ぶ子どもたち．大学生や保護者，地域の方と一緒に「アヒル池づくり」に取り組んだ．

きっかけは，光る霜柱集め



アヒル池に集う幼児

＜生き物に心を寄せ，深くかかわる＞

合鴨のヒーちゃんがオタマジャクシを食べ過ぎて食中毒になった．「元気がない」「泳がない」と異変に気付き，心配した幼児は，学校獣医師の益田先生に往診をお願いした．

長年飼っていたニワトリのシロちゃんが亡くなる前にも，「あんまり餌を食べなくなった」など体調の変化に気付き，益田先生に症状を説明していた．「魂は見えるの？」と尋ねる幼児もいた．

益田先生を囲んでアヒルを見る幼児

３　学びをつむぐ姿と学校獣医師との連携

飼育している生き物の世話をしたり，遊んだりして触れ合う日々の生活を通して，幼児は心を動かし，感動や発見を伝え合うようになっている．幼稚園で一緒に生活する小さな生き物との出会いや別れを通して，動物の体調を気遣ったり，動物の気持ちになってかかわったりする姿も見られた．学校獣医師とのやりとりは，幼児の心に響き，生き物と深く向き合う姿につながった．今後も専門家の力を借り，子どもにとってよりよい環境づくりに努めたい．

（東京学芸大学附属幼稚園教諭）